

綴葉

て
い
よ
う

'23 12

No. 423

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

早尾貴紀著『ユダヤとイスラエルのあいだ—民族／国民のアポリアー— 新装版』

M. アルヴェッソン／J. サンドバーグ著『面白くて刺激的な論文のためのリサーチ・クエスションの作り方と育て方』

特集／いろんな人間、いろんな書評

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

 **univ.** 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

イスラエルと正面から向き合う

ユダヤとイスラエルのあいだ

—民族／国民のアポリアー 新装版
早尾貴紀著 青土社



パレスチナ問題が再燃した。この問題の根底に、「国民国家」体制における「国民」とは何かという問いがある以上、今のパレスチナとイスラエルのような状況にこの国も陥る可能性がある。こうした背景から、著者の早尾貴紀教授は、イスラエル単体ではなくヨーロッパ思想史の観点からイスラエルを考察する。特に、イスラエルをヨーロッパの帝国主義的近代国家として捉え、その創設から現在も抱える解決困難な問題——アポリアーに切り込んでいく。

第二次世界大戦下でのナチス主導による迫害を機に、「約束の地」として誕生したイスラエルが抱えるアポリアーは大別すると三点ある。一点目はユダヤ人だけの国家創設は反ユダヤ主義を肯定することになる問題。二点目はイスラエル国民をユダヤ人（単一民族）のみとするか、イスラエル在住者（国籍所持者）とするかという問題。三点目はユダヤ人のみで構成する単一民族国家創設、ユダヤ人とパレスチナ人が一国内で共存する一国家二民族共存、ユダヤ人とパレスチナ人が一国内で共存する一国家二民族共存、ユダヤ人とパレスチナ人がパレスチナの地を分割して各々国家を創設する二国家分割、いずれの案でもシオニストが満足できないという問題だ。

こうした問題について、多くの思想家たちが議論を戦わせてきた。バトラーはイスラエルによるパレスチナ支配を批判し、バーリンは

リベラルなユダヤ人思想家としてイスラエル建国を支持した。パレスチナ人のサイドはイスラエルのイデオロギーから戦争犯罪行為を批判した。今回は、フーバーと同じく一国家二民族共存を訴え、本書で最も紙幅が割かれているアーレントを取り上げよう。

アーレントもフーバーも共存を訴えていたが、彼らには思想の違いがあったため交流はなかったと筆者は見ている。まず、フーバーと違ってアーレントはパレスチナの地にイスラエルがある必要はないと考えていた。次に、アーレントは多民族国家の類型としての二民族国家を想定し、フーバーはユダヤ人とパレスチナ人のみの二民族国家を想定していた。だが、結局は単一民族国家を目指したイスラエルが建国され、アーレントは沈黙する。とはいえ、彼女はシオニストであり、パレスチナ人の味方ではない。現に、ユダヤ人がパレスチナの地に国家を樹立する前提で議論を進めていた。

このように、思想家同士で交流がなかった事実など、言外の部分に焦点を当て、思想家たちのイスラエルに対する考えを分析している点が本書の見所だ。読み進めるほどに、日本ではあまり報道されないイスラエルの加害者性が露わになってくる。ユダヤ人に対して負い目があるにせよ、昨今の大量虐殺を容認してはならない。過ちを繰り返さないためにも、我々はイスラエルと正面から向き合うべきである。最後に自戒を込めて、著者の言葉で締め括る。

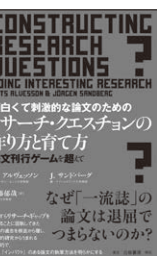
「日本にせよ、イスラエルにせよ、根源的な批判力が弱まってきている。それは思想における厳密な批判の欠落でもある。」

本誌一五頁にて、造詣を深めるための書籍をご案内中。（前髪）

（二四七頁 税込三六三〇円 8月刊）

IF値よりも本質的な「インパクト」のある論文を書くために

面白くて刺激的な論文のためのリサーチ・クエスチョンの作り方と育て方―論文刊行ゲームを超えて



M.アルヴ・エッソン J.サンドバーグ著
佐藤郁哉訳 白桃書房

「なぜ『一流誌』の論文は退屈でつまらないのか?」—— なんと
も挑戦的な文句が帯を飾る。著者は「何らかの意味で論文の質は向上したのかも知れない。しかしだからと言って、それに対応して面白くて影響力のある理論の数が増えたというわけではない」と言う。そこで本書は、研究という営みの根幹にある「問い」に目を向ける。

◆ギャップ・スポッティング―論文大量生産装置―

社会科学においては、先行研究の隙間を見つけ出しそれを埋めるための——ギャップ・スポッティング的な——問いが主流であると筆者は分析する。そして言う、それらは「面白くない」と。

こうした問いは先行研究の前提を容認・補完するものだ。それゆえ、「既存の理論や先行研究の根拠に対して挑戦するのではなくむしろそれらを再生産する傾向があるので、面白い理論の開発につながる可能性は低い」(なんとも耳が痛い話だ)。

◆ではどうすればいいのか?——「問題化」という方法論——

インパクトのある理論に結びつく面白い問いを生み出すには、「特定の研究テーマに関する既存の理論(自分のお気に入りの理論

を含む)の根底にある前提に光をあてて、それに対して「挑戦」すること——「問題化」——が必要だと筆者は述べる。既存の理論をなぞるのではなく、学派やパラダイムのなかで共有されている前提を問い直し、弁証法的に新たな理論を生み出していくのだ。

言うは易く行うは難し? いやいや、本書には「問題化」の実践例も豊富に盛り込まれており、自身の研究に活かせる具体的なヒントが盛りだくさんだ。要点が図で整理されているのも嬉しいところ。最後に本書の魅力をもう一つ。本書は「なぜつまらないギャップ・スポッティングが学界では支配的になっているのか?」と、学界それ自体に「問題化」を行っている。業績主義、競争の激化、分野の細分化、研究者のキャリア……これらは京大生にとっても他人事ではない。ぜひその目で本書の結論を確かめてもらいたい。

◆学部生のあなたに——あなたの問いはどこから?——

とはいえ、自分の問いが何かわからない、関心がある分野も定まらないという学部生の読者もおられるはず。ご心配なく。そんなあなたには「リサーチのはじめかた」「きみの問い」を見つけ、育て、伝える方法(筑摩書房)をお薦めしたい。副題通り、あなたの問いと伴走してくれる最良の書だ。そしてまだ時間が残されている一・二回生には、より根源的に自らの「問い」に向き合ってもらいたい。『問いの立て方』(ちくま新書)が良き導き手となるだろう。

問い——それは知への扉を開く鍵穴だ。最後に本書に倣い、この言葉を贈ろう。破壊的創造を生み出す探求者たち。(浅煎り)

(二九六頁 税込三〇〇〇円 6月刊)

権力の空間／空間の権力
個人と国家の〈あいだ〉を設計せよ
 山本理顕著 講談社選書メチエ

『人間の条件』の著者として有名なハンナ・アーレント。彼女は一般に「政治の思想家」として知られている。しかし本書が提示するのはいわば「建築の思想家」としてのアーレントである。アーレントの思想を手がかりに、建築のあるべき姿を考えること、そしてひいては現代の都市や住居が抱える諸問題をあぶり出し、新たな都市計画＝住宅設計を提案すること、ここに本書の目的がある。

ここで少し、アーレントの思想に触れておきたい。彼女の思想において「世界」概念は格別の位置を占めている。世界とは、建物のような持続的な人工物から形成される空間のこと。それは私たち死すべき人間の寿命を超えて存続する。それは人間を時間的に超越する。それゆえそこには、過去の出来事の痕跡や過去の人間の記憶が堆積している。つまり世界は「建築化された記憶装置」なのである。世界とは「そこに住む人たちの記憶を未来に向けて伝達する空間である。自分がそこに存在したという痕跡を残す空間である」。たとえば私たちは、古い民家を訪れると、かつてそこで営まれていた生活や、かつてそこに暮らしていた人びとの気配を感じ取る。そのようにして建築は、過去の記憶を未来に伝達する。

しかし著者曰く、そうした建築はいまや消え去ろうとしている。「仕事」を通じて形成される永続的な「世界」は、「労働」を通じて形成される刹那的な「社会」に呑み込まれようとしている。現代建築の寿命は非常に短い。だとすれば「これからやってくる住人のために、いつまでもそこにあってほしいと地域社会の人々が思うような建築」、そうした美しい建築はどうすれば取り戻すことができるのか。それを語るのが本書である。(ばや)



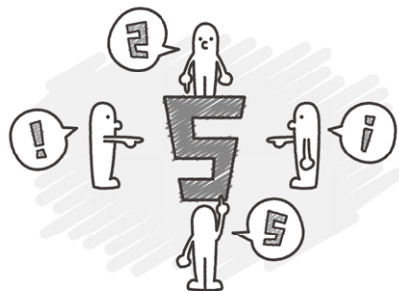
特集

いろいろな人間、 いろいろな書評

「いろいろな人間、いろいろな書評」ということで、実験的な特集を組んでみました。その合言葉は「一人の数だけ書評がある!」。

当たり前のことですが、複数人が同じ本を読んでも、そこから同じ書評が生まれることはありません。多少の重なり合いはあるにせよ、そこには必ず、独自の視点と文体を持った書評が生まれるはずです。だとすれば、書評は具体的にどのような違いを見せることになるのか。お堅い書評誌では実現できないこの特集を、適度なゆるさを持つ本誌で実現させようと思います。

ということで、駄弁を弄するのはやめて、早速書いて! !



アーレントを専門とするばや、地域研究を専門とするブラチ、建築を専門とする茫漠、この三人が集まったならこの本をやるしかないということで、本書が選ばれました。アーレントの思想や、世界各地の都市や建物を参考にしながら、建築の未来を考える。それが本書の企てです。建築論としてだけでなく、ひとつのアーレント読解としても面白い。アーレント研究者の端くれとしてそう思いました。ということで、本書の多様な側面を、以下の三つの書評で味わっていただければと思います。

「設計という行為は、人々に未来を提示することなんだよ。」学部時代、設計の授業で幾度となく聞いたその言葉に、私はあまり実感が持てずにいた。あの頃の私に読ませたい。本書は空間の持つ政治性を示し、そして設計者の責任の重大さを記述する。建築に携わるものとして背筋が伸びる一冊だ。

建築と権力を結びつけるものとして本書で繰り返し用いられる「物化」は、アレントから引用された概念である。思想は空間となることでリアリティを得る。もはや当たり前となっている「1家族＝1住宅」の現代の暮らしも、官僚制的思想を具体化したものであると著者は指摘する。住居となることで、あたかも現在の暮らしが社会的要請であるかのように認識され、政治参加への自由のない現代に誰も疑問を呈さなくなの。ここに建築の可能性と、恐ろしさがある。

著者は、標準化・画一化された住宅を設計し官僚制的思想の「物化」に囚らずとも加担した二十世紀の建築家の責任を指摘する。そして言う、「空間は未来の住人に引き渡す権力なのである」と。空間は思想を具体化する。だからこそできることがあるはずだ。本書の後半には「地域社会圏」という具体的な提案や、『自ら決める意思』を持った人々が住む空間を実現しようと奮闘した記録などが描かれる。管理装置的な現代の建築の在り方を変えようとしている一人の建築家の姿に、勇気づけられた。

本書は壮大な建築論を展開しているようだが、客観的な視点での建築批判がなされている。アレントの主義を軸としているためか、建築から一步引いた視点があり、現代社会を生きるすべての人に向けて書いているように感じた。私たちは未来に向けて、どんな空間を作ることができるだろうか。 (茫漠)

(264頁 税込1980円)

「空間の権力」はどのように女性の社会的地位に影響を与えたのだろうか。本書では空間における男女格差やその役割にも言及している。

官僚制的行政を基盤とする現代「社会」では、行政が管理しやすいような空間を持つ建築物を人々は無意識に求める。この「社会」空間は、人々が競争心や個性、そして真実の自分を曝け出すことができる「世界」空間とは異なる。「社会」では、すべての価値が金銭であると考えられ、人々は仕事ではなく労働のみに従事し、個性やアイデンティティは社会平等の混乱をもたらすと考えられる。

著者は「世界」における都市空間を肯定しているが、この空間にも弱点がある。それは、都市空間全体の公的空間を男性の領域、そして私的空間を女性の領域と隔離した上で、公的領域に存在する男性に対してのみ自由と平等な権利を与えていたことである。この点、「社会」においては、都市空間の中に家庭が含まれなくなったため、都市空間における男女格差は見えにくくなったのである。

しかし、「社会」における議論からは、女性に関連する論点が抜け落ちているように感じられる。このことから、必ずしも都市空間の建築方法によって「世界」が「社会」に転換したことで女性にも自由や平等が与えられるようになったとは言い難い。

また、特に途上国と呼ばれる国々では、官僚制的支配によって政が行われている社会空間においても、未だに「世界」すなわち男女それぞれの領域に大きな隔たりを持たせる空間構築をするような建築物が多く散見される。本書ではこのような「世界」的建築空間と「社会」的公共空間の混在している領域についての議論は一切なされていない。このような矛盾点に対して筆者がどのように議論を行うのか、続編に期待したい。 (ブラチ)

前髪と朝露、双方ともに教育への関心が高いことから本書を選びました。

応用言語学徒の前髪は教育実践に際した言語の問題に、哲学徒の朝露は教育実践の現場に関心があるといった違いを楽しんでもらえれば幸いです。

じぶんで考えじぶんで話せること も育てる哲学レッスン 増補版 河野哲也著 河出書房新社

哲学対話を通じた教育法、こども哲学。その議題は身近な所から湧き出てくる。著者が小学校を訪れて実践した際の例を見てみよう。

あるクラスで、「禿げ」をテーマにしたいという声が上がった。どうしても哲学に繋がらなさそうに見えるが、著者はこれをふざけた意見だと断じることなく、ただ「どうしてそのテーマにしたいと思ったの」と真剣に深掘りを促した。するとこどもたちは、変化する身体への不安と、それを揶揄したくなる感覚があるということを徐々に自覚し、ついには「どうして禿げるとバカにされ、差別されるのか」という問いに辿り着いたのである。

本書は、こども哲学の理論だけでなく教育者向けの指南まで備えている。その中で著者は、こどもたち自身が問いを立てることの重要性を説く。「大人や教師が考えさせたがっている問いをこどもに与えてしまうと、その瞬間から、こどもは大人が求めている正解を探ろうとします」。この鋭い記述に私はハッとさせられた。哲学の醍醐味——常識や自らの思い込みに批判的になれること——を失わないための、重要な教訓である。

こども哲学の美点は、思考力や対話能力を伸ばしつつ、己の生き方や社会のあり方を問う姿勢も身に付けさせることだ。本書はそれを強調するための反面教師として、文献研究に終始する知識偏重の「アカデミズムの哲学」を対置するが、この理路には首肯しかねた。先述の美点は本来、哲学の営み全般のもので、そこには学問的な哲学も含まれると私は思う。

一人一人が哲学的な問いに向き合える社会を実現する、という本書の目標に私は強く共感している。だからこそ言いたい。そんな社会の実現には、こども哲学のような市井での対話とアカデミアでの探究の両輪が必要で、それらは行き来可能なはずであると。(朝露)

(288頁 税込 1925円)

こどもは深く考えられない、という偏見が「じぶんで考えじぶんで話せる」機会をこどもから奪う。一方で、その機会を与えるのはこども哲学である。哲学者・河野哲也氏によって、この哲学の理論と実践が記されたのが本書だ。

それにしても、こども哲学とは何だろうか。河野氏は「自分の人生の捉え直しと新しい文明の構築のためのコミュニケーション方法として役立つ」ものとしている。つまり、こども同士で哲学的なテーマについて話し合うことで、他人と合理的に議論する力、自律的に考える力を養う教育法のことである。

「受容」と「対話」、この二つがこども哲学を支えるキーワードだ。まず意見を言っても大丈夫と安心できる環境を整え、その環境下で対話——驚きから始まり、探究と思考によって進む会話を行えば、自ずと思考は深まる。そして、この対話に答えは必ずしも必要ない。なぜなら、考えるプロセスが肝要だからだ。

こども哲学の日本での普及を願ってやまない。だが、普及するにつれ、扱える言語が日本語でない場合や日本語の運用能力に差がある場合などの対応を迫られるだろう。なぜなら、日本には日本語指導を必要としているこどもが現在約6万人いるからだ。彼らは言語的に不利なため、進学率が低く、中退率が高い。それゆえ低所得者になりがちだ。ここから、社会からの疎外感を抱いていてもおかしくない。こうしたこどもたちにも/こそ、こども哲学が届いてほしい。言語が異なろうとも、こども哲学を実践できるようなするにはどうすべきかを考えるのが今後の課題だ。

こどもへの偏見を一掃すると共に、教育について考え、話し、実践するよう促す一冊、ぜひ手に取っていただきたい。(前髪)



けちで意地の悪い老人スクルージ、クリスマスの亡霊に連れ出された彼の眼前には過去・現在・未来のクリスマスの様子が映し出される。この世の惨状と人々の温もりに触れた彼は……。小説こそ読み方は千差万別。名作をあなたはこう読む？

クリスマス・キャロル

チャールズ・ディケンズ著

村岡花子訳 新潮文庫

光に満ちた街へ人々が繰り出す。その傍らでは、催し事など知ったことかというように淡々と残業をこなす会社員が。ここ日本においてクリスマスは一つの“イベント”であって、その重要性は人それぞれだ。

しかし近世ロンドンでは事情が違ふ。クリスマスは家族と共に一年の労をねぎらいつつ、神に感謝するこの上なく重要な日だ。この『クリスマス・キャロル』でも、人々は家族や仲間と共に食卓を囲み、幸福の真中にいるかのように笑い合う。

この「笑い」というものが本作のテーマの一つであるように私は思う。物語前半、人間を嫌い、人間に嫌われたスクルージは不幸の絶頂にいるかのごとく、その顔にしかめっ面を貼り付けている。時折見せる彼の笑いは「皮肉」から生まれる「嘲笑」であって、周囲の人間を愉快にさせる代物ではない。では、過去・現在・未来の聖なる夜を見た後の彼はどうか。日常の些細なことにも声をあげて笑い、見知らぬ人々にも微笑みかける。自身の豹変ぶりを笑う人がいても咎めはしない。寛大な心でその冷笑を受け入れる。冷たく自己中心的であった彼の笑いは、周囲を巻き込む寛大で温かな笑いへと変わっていく。

彼の変容の裏にあるのは、世界の残酷な一面との出会いである。純心な幼子の死、自身の悲惨な死、そしてあらゆる災禍の根源となる「無知」と「欠乏」の醜態。あまりに醜悪なこの世の有様を目にしたスクルージは現在の生に感謝を捧げ、日常のどんなに小さな事柄にも幸せを見出ししていく。

何がクリスマスだ！と斜に構える気持ちもわかる。だが今年ぐらいは、改心したスクルージのごとく寛大な心でその日を迎えよう。悲しみで溢れたこの世界に、人間に、期待を抱きながら。

(はらん)

(189頁 税込473円)

本作品は、意地悪な老人がクリスマスの奇跡によって心を入れ替える、そんなよくある物語のように思える。しかし、1843年の出版からこれまで愛され続けてきた名作がそれだけであるはずがない。英国の文豪ディケンズが贈るクリスマスの物語を今一度皆で読んでみようではないか。



周囲の人間から孤立し、人に親近することもなく、他人を見下すスクルージ。全くもって擁護のしようがない人間に思えるのに、どうしてか読者はスクルージを嫌いにはならない。時折挟まれる語り手の言葉のせいだろうか。物語の語りを通して、ディケンズの愛ある眼差しが、気付けば私たちにも伝染しているのである。悪人に見えたスクルージにも多様な側面があり、一人の愛すべき人間であることを知る。すると、亡霊が「いとしみをこめた眼で彼を見た」とときには、読者もなんとなく切ない思いを彼に対して抱くのだ。

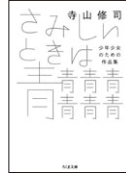
物語冒頭、スクルージは、クリスマスの寄付を募る紳士を、余計な人口が減るならそれでよいと追い返す。罪を犯したわけでもあるまい、特に罪悪感もない様子。それにもかかわらず、亡霊がかわいそうな子どもの死について同じ言葉を繰り返した際には、「かつて自分の言った言葉をこのように幽霊が引合いに出すのを聞いてうなだれ」るのである。都合が良い態度だと思うだろうか。私はそうは思わなかった。少なくともスクルージは自分の言った言葉をきちんと覚えているのだ。無意識にまで染み込んだ悪人ではない、まだどこか救いのある人間なのではないかと思える。

名作は読者を納得させる。ディケンズの人物描写の妙は、明日からまた人間に期待してみようかと思わせる説得力がある。(ひるね)

新刊コーナー

さみしいときは 青青青青青青

—— 少年少女のための作品集
寺山修司著 ちくま文庫



海を知らぬ少女の前に
に麦藁帽のわれば両
手を広げていたり

私が寺山修司を知

ったのはこの短歌がきっかけだった。だから
なのは分らないけれど、私にとっての彼
はいつまでも若く、どこか青い世界にいる。
そして先月、彼の作品集が新たに編まれた。
それはひりひりとした青い光を放つ、「少年
少女のための」詩と物語。

解説・幾原邦彦曰く、寺山修司には「ちょ
っと粋なカフェで女の子に語るホラ話のよう
な楽しさ。これから待ち受ける恐ろしい大人
の世界に船出しても、なんとかやり果せるか
もしないとロマンチックに錯覚できる楽し
さ」がある。そしてこの軽薄の裏に透けてい

るのは、絶対的なさみしさだ。では寺山修司
の言葉にぞ登場願おう。「海の水の最初の一
滴が一人の女の子の涙だった」と思っている少
年がいた。「人はだれでも『さよなら』と言

うときに希望をいなく。だが、『希望は人類
の最後の病氣だ』ということも知らないで。
(ね、さみしさが降り注いでいるでしょう?)
彼は決してそのさみしさを突き放さない。
かといって懇々と寄り添うこともない。ただ
彼は自在におどけて、傷を、恋を、涙を、そ
の激しさで果てしなさを鮮烈な青に込める。
二〇歳を超えた今でも心の中に少年少女が
棲みついて離れてくれない——そんな人がも
しいのなら、どうか悲しまないでほしい。
これはきつと、いつまでも少年であり少女で
ある、あなたのための本だ。

(三五二頁 税込九九〇円 10月刊)

(浅煎り)

ノウィットオール あなただけが知っている

森バジル著
文藝春秋



「小説というもの
に必死に手を伸ばし
た作者の叫びが聞こ
えた」。

本作は第三〇回松本清張賞受賞作である。
名だたる選考委員達に満場一致で認められた。
先に引いたのは、米澤穂信氏による選評だ。
本を閉じて帯のこの言葉を見た時、「あ、本

当にそうだったな」と思った。「小説」とい
うものへのぶ厚い信頼の上で、火花を両手に
飛び駆け回るような、圧倒的熱量とピンと張
った生の輝きに満ちた一冊の小説なのだ。

本作は六つの小説から成る。個々違うジャ
ンルの。具体的には、推理小説・青春小説・
科学小説・幻想小説・恋愛小説、そしてそれ
らを総括するエピソードだ。これらの小説は
段々リンクしていく。一つの街を舞台に、異
なる五つの世界線を生きる人々の物語なのだ。

登場人物のキャラクターが立っているのも
本作の魅力だ。暴力団に超高額な依頼料を突
きつける女性名探偵。未来人から狙われる女
子高生。魔界を追放された魔法使い。人に言
えない事情で失恋した三〇歳女性。軽妙な文
章の中でクセの強い彼女らが生きている。

六つの短編の中でもM-1を目指す高校生
コンピを書いた青春小説「イチウケ!」は抜
群のエネルギー量を誇る。勉強も恋愛も疎か
に発声練習滑舌トレーニングストリート漫才
高校生活を漫才に注ぎ込む打ち上げ花火のよ
うな刹那の莫大な煌めき。緊張の吐き気やネ
タが飛び恐怖も乗り越え、大人・プロと同じ
舞台でぶちかまし進む姿が眩しくて文字が滲
む。彼らの漫才は世界線を超え、響いていく。

読後暫く放心した。尊い時間だ。(黄丹)

(三二〇頁 税込一七六〇円 7月刊)

祝福

高原英里著

河出書房新社



呪なのか祝なのか
——帯に刷られた言葉に惹きつけられる。

九つの短編からなる

本書は、各編の言葉が響き合い一つの世界を成している。ある種長編作品ともいえる。

「呪」と「祝」は表裏一体とはよく言うが、二つが反転する境界はどこにあるのか。まさに冒頭の一節が、本書に通底する問いとなる。

例えば古文を読んでいるとき、例えば外国語の朗読を聞いたとき、よく分からないがなんとなく気に入るということがある。言葉そのものの求心力だろうか。本書は、現代日本語で書かれているというのに、そんな感覚を生じさせる。どこか掴みどころがない、しかし、「わたし」の視点で進む物語は、その意識とともに流れるように描写され心地よい。

とはいえ、よく分からないものは解釈してみたい。本書は、その随所に伏線とも思える言葉が散りばめられ思索が捗る。ただ、夢中で読み進めていると二つ疑問が生まれる。「解釈」してしまってもいいのだろうか、と。

第五編「目醒める少し前の足音」では、ある少女がブログに綴った言葉を教えるとする宗教が描かれる。ここでは、聖典であるブログ

上の言葉を「解釈」すること、「無関係の破片である言葉を……あたかも連鎖するもののように仕立てること」と述べている。そこにあることがありがたかったはずの言葉が、「解釈」を経て変容してしまっていないか。第九編「帝命定まらず」は、一つの解とも

読める。「わたし」は、よく分からない音の響きを「解釈」し意味を見出す。さて、そこにあるのは「呪なのか祝なのか」。(ひるね)

(二五六頁 税込二四二〇円 7月刊)

可哀想な蠅

武田綾乃著

新潮社



対等な人間関係を築くことが難しく、

社会から距離を置かれていた人々。S N

Sで暴言をまき散らす人、猫からしか愛されない人、他者に尽くすことでしか関係を結べない人。本書は、こうした「可哀想」な人との後味の悪い交流を描いた短編集だ。

読み終えてから振り返ると、本書に出てく

る「可哀想」な人たちはできれば関わりたくない人たちばかりだ。しかし、哀れみや同情、そして偽善的な感情から「私」は交流を持ってしまう。誰かを「可哀想」と感じた時点で、その人は自分より下の存在だと認定しており、もはや対等な人間関係ではあり得ない。自らが上位であるという無意識の優越感がなければ、わざわざ「可哀想」な人と距離を縮めようとは思わないからだ。

対等でない歪な関係が平穩無事に保たれることはなく、きっかけ一つで関係は崩壊してしまう。本書では、この崩壊がスリルを生み、各短編を緊張感あるものになっている。不吉な匂いが濃くなってきたなと感じた時には手遅れであり、生々しくリアリティのある悲劇が幕を開ける。じわじわと高まってきた嫌な予感が的中する瞬間のカタルシスは、陰鬱な内容でありながらジェットコースターのような爽快な読後感を与えてくれる。

本書に収められている作品のほとんどが救いのない結末を迎える。悪意をまき散らす「可哀想」な人が報いを受けたり、被害を被った「私」が救われたりするものもない。ひたすらに嫌な気分浸れる一冊であり、覚悟を持って本書を開いてほしい。(茂)

(二二八頁 税込二七〇五円 9月刊)

わたしの香港
消滅の瀬戸際でカレン・チャン著
古屋美登里訳 亜紀書房

出町の映画館である映画を見た。舞台はコロナ禍の香港、清掃業の主人公は防護服をまとい、休業中の飲食店で消毒水を噴霧する。顔を覆い隠すマスクが霧で霞む——それが催涙ガスのメタファーであることは明らかだった。二〇二〇年の国安法制定後、声を上げることままたらない香港で人々にできることは、この都市の姿が消えてしまわないように、記録し、記憶し続けることだ。



本書は香港在住のジャーナリストが半生を振り返り、自らの生きた香港を描く回想録である。祖母に育てられ、母と弟に会いにシンガポールへ行くのが嫌だった幼少期、ルームシェアを転々とした大学生活、うつ病を患いながらインディーズ音楽シーンや活動家の声を拾い集めたジャーナリスト時代、そして二〇一九年デモ。生々しいほどに描写される日常の細部には、歴史・政治経済のグローバルな関係によってつくられた香港という都市の空間性が現れる。英語が流暢なインター

ナショナルスクールの友達は香港から次々になくなること、資本によって開発されていく下町、都心の極小アパート、今はもうない工場跡のライブハウス。全てが複雑に絡み合い、愛憎の中でアイデンティティが形成されてきた香港。その無数の若者の声の中に、彼らが守ろうとしたものが見えてくる気がした。

詩情のある筆致で回想は淡々と進んでいく。そしてクライマックス、デモ隊に吠えた警察へのアンサーを、著者は最後の一文に記した。彼女の静かながら力強い抵抗を、香港の矜持を、その目で見てほしい。(たいやき)

(四二〇頁 税込三〇八〇円 6月刊)

信仰と越境のウイグル

「進歩」の共和国から復興の
イスラム共同体へ

中屋昌子著 文理閣



新疆ウイグル自治
区——二〇二一年に
ファストファッション
の不買運動が世界

各国で行われた際に耳にした人は多いのではないだろうか。この地域は一九四九年以降、中華人民共和国の共産党政権により支配されている。しかし、共産党政権下では宗教その

ものが否定的に捉えられていることから、「信仰ゆえに故郷を離れる事態になっただけ」人々がウイグルを離れる事態になっている。本書ではトルコへと亡命したウイグルに焦点を当て、その歴史や人々のイスラム信仰実態について記述している。

中国当局が新疆で実行している宗教統制・脱宗教化の手法、人々が監視の目をかいくぐりながら信仰を貫いている方法など、第三国に亡命をしなければならぬウイグルの状況が体験談と共に記されている。「宗教活動に關しては、私的・公的空間に關係なく過敏に反應する社会が形成されつつある」という表現からも、人々が宗教信仰を続けることがいかに困難であるか理解できる。

携帯電話の待ち受け画面や、家から数メートル離れたゴミ捨て場に行く際の服装まで監視されている毎日。もし自分であれば発狂しているであろう。このような当局による厳格な監視下、そして法の下の平等が成立しない状況において祖国を捨てることを選択するウイグルの強さ、そして信仰深さには脱帽である。中国当局による諸自由とプライバシーの侵害はもはやトレンドとされる問題ではない。しかし、人々は苦しみ続けている。このような問題にも是非目を向けてほしい。(フラチ)

(二七四頁 税込二七五〇円 10月刊)

ひとりだと感じたとき あなたは探していた言葉 に出会う

若松英輔著 亜紀書房



孤独を感じる時、
あるいは生きること
に疲れて立ち止まり
たいと思った時、あ
なたは何をするだろうか。友人と語り合うの
も良い、一人歩いて景色を見に行くのも良い
が、誰かが過去に紡いだ言葉を読むことでし
か心が救われない時がある。

本書は、「読むと書く」という自主講座の講
師を務め、NHK「1000分de名著」で指南
役としても活躍する著者が、誰かに寄り添う
「言葉」を参照しながら綴るエッセイ集である。
キリスト教世界の古典に始まり、ルーグウィ
ンの『ゲド戦記』、高村光太郎の手紙の二節、
精神科医神谷美恵子の『生きがいについて』
……と、文学作品に限らず幅広い文章が取り
上げられる。共通しているのは、それらの言
葉が、書き手のかけがえの無い経験から紡ぎ
出された必然的なものであるということ。

著者は言う、「生活の中で人は、多くの言
葉を知る。（中略）だが人生の一語は、そう
した場所では出会わない。それはいつも切実

な経験とともにある」と。著者は仕事を通し
て、のべ一万篇を超えるエッセイや詩を読ん
だという。だが、ただ膨大な言葉に触れるだ
けでは「出会う」ことはなかっただろう。著
者が抱えていた孤独や人生への迷いが、ある
言葉を感じするための引っ掛けとなる。

何でも簡単に調べられる現代。だが、自分
に寄り添う言葉は検索しても出てこない。本
書は「言葉の処方箋」であると帯に書かれて
いるが、それは読み手の切実なる孤独と合わ
さって初めて真価を発揮するものであろう。
長い時間をかけて向き合いたい一冊。（芝漢）

（二五二頁 税込一七六〇円 9月刊）

ポケット顧問 や、此は便利だ

下中彌三郎／秋永常次郎編

平凡社



本書によると、十
二月の風物詩「児童
を愛護する不可思議
なお爺さん」ことサ
ンタさんは、煙突ではなくて、「窓からはい
つて」くるらしい。

ときは大正三年、埼玉の教育者であった下
中彌三郎は、労働者階級も新聞を読めるよう

にと、新語・流行語等を集めた実用的な新語
辞書を作った。これに目を通した友人が
「や・此は便利だ!」と唸ったという。下中
はこれを創業出版として、「平凡社」を設立
することになる（初版は成蹊社から出たが、
こちらは直後に倒産の憂き目に遭った）。

見出しには「アイロニー」、「世界語」、「未
来派」といった外来語、新概念、芸術動向を
示すものが多く並ぶ。また、「危険思想」、「
言論の自由」、「国家主義」、「婦人問題」と
いった世相を反映する言葉には紙幅が割かれ
ときに挟まれる著者自身の見解は、当時の一
知識人のものとして興味深い。

現代人にもおなじみの言葉も散見される。
「クリーム」や「コスメチック」といった生
活品の項は欧米化されていく当時の生活を物
語るし、「簡易生活」、「菜食主義」などは現
代にも通ずる。と同時に、今と比べると意味
に差異も見出され、大正以降の言葉の変遷も
気になるところだ。頁を繰る毎に百年前の言
葉が躍り、ときにクスリと笑わせてくれる。
「アイス」は「氷」との音通から「高利」を
意味し、冷たさも共通するという解説は、な
んとも洒落が利いているではないか。

（投稿・からまっこ）

（四四九頁 税込一七六〇円 6月刊）

カントからヘーゲルへ 新版

坂部恵／納富信留解説
東京大学出版会



私は学部生の頃、図書館で偶然にも岩崎武雄の『西洋哲学史』（有斐閣）と出会ひ、そして驚嘆した。先哲の思想とは、偉大で、深淵で、難解なものではなかったのか。哲学史をこれほど明快に記述し得る人がいたのか、と。そんな岩崎が自らの専門領域を解説する本書が、先日新版となり復刊された。

本書はカントからフィヒテ、シェリングを経てヘーゲルへと至るドイツ観念論を扱う。

その哲学の流れに対する評価は、解説・坂部恵の言葉を借りれば「近世的人間とその世界観の自覚における進歩発展とみるか」「逆に、人間の有限性の批判的自覚から、ふたたびそれを忘却した神秘的・観念的形而上学への逆もどりの過程とみるか」に二極化しがちであるが、岩崎がその一方に偏ることはない。彼は四者それぞれの問題意識を見透かし、自らの確固たる枠組みに心地よく位置づけてゆく。一方、新版で新たに収録された納富信留の序文は注意を促している。「哲学史が多様

であるのは、それが書き手の哲学そのものだからである」。岩崎に導かれながら、岩崎の限界と偏りも意識して読むべし。この序文は、現代の読者に対する最良の計らいだと言える。私は、倫理の授業や哲学史の講義で少しでもドイツ観念論の知識を得ている全ての人に、この本を推薦したい。安易な言い換えや戯画化に頼らない解説に、きっと納得するだろう。自らの課題と戦った大哲学者たちの勇姿には、静かな興奮を覚えるだろう。伝記も交えた岩崎の語りは常に落ち着いていながらも、面白さでは英雄列伝に匹敵するはずだ。（朝露）

（二八八頁 税込三五二〇円 9月刊）

綴葉編集委員募集および 投稿募集のお知らせ

『綴葉』編集委員会では、編集委員を新たに若干名募集します。

仕事内容は、毎月二〜三本の書評を書くこと、毎週金曜日に行われる編集会議に出席して『綴葉』の編集作業に携わることです。編集委員には毎月若干の活動手当と、書評で取り上げた書籍の代金が支給されます。

対象は、京都大学生協加入者で大学院の修

了課程ないし医学部の五回生以上、そして右記の仕事を継続して行うことが出来る方です。この条件を満たし編集委員としての活動を希望される方は、本誌添付の読者カードに編集委員会への参加希望の旨を明記の上、生協のひとことポストに投函するか、『綴葉』表紙記載のメールアドレスへ直接お問い合わせ下さい。追ってご連絡申し上げます。

また、読者の皆様からの投稿も随時受け付けています。採用させて頂いた方には、書籍代（上限二五〇〇円）および薄謝を図書カードにて差し上げます。ふるってご投稿下さい。書評の形式は次の通りです。

①「新刊／新書コーナー」：新刊二〇字×三二行、新書二〇字×二三行。出版されてから四ヶ月以内の書籍を対象とします。

②「私の本棚」：三〇字×四二行。普段の読書の中で特に面白かったものを紹介、批評して下さい。刊行時期の制限はありません。

二冊以上取り上げたい場合はご相談下さい。

◆
いずれの場合も、書名・著者名・出版社名・総ページ数・発行年月・税込価格と投稿者の氏名・所属・連絡先・ペンネームを明記して下さい。郵便・メールどちらでも受け付けます。宛先は本誌表紙を参照して下さい。

ガウスの黄金定理

平方剰余の相互法則で語る数論の世界
西来路文明／清水健一著 ブルーバックス

素数が自然数の中でどのような規則で並んでいるのかはあまり分かっていない。しかし、素数が割った余りの世界で平方数という構造を考えると、素数同士の間になり立つある法則が見えてくる。これがガウスの黄金定理だ。本書はガウスの黄金定理——平方剰余の相互法則——をじっくりたっぷりと紹介している。黄金定理を用いて実際に計算することから始まり、ディオファントス、フェルマー、オイラー、ルジャンドル、そしてガウスまでの数論の歴史が紹介され、最後にガウスが黄金定理に与えた七つの証明の概略を辿る。証明の中には複素数や二次形式の判別式を用いた技巧的なものもあり、黄金定理の奥深さが感じられる。

本書は非常に丁寧な構成をしており、予備知識を必要とせず理解できるようになっている。前半では可能な限り四則演算のみで説明されており、途中式の省略がほとんどなく、議論に置いて行かれることもない。素数や代数学、そして数学という営み自体に興味を持つ人ならば誰でも楽しめるだろう。(茂)

(二七二頁 税込二二二〇円 10月刊)

現代フランス哲学

渡金喜庸哲著
ちくま新書

一世を風靡した「フランス現代思想」。その代表者であるフーコー、ドゥルーズ、デリダの名前は、今でも燦然と輝いている。しかし、と著者は言う。彼ら現代思想のスターたちが活躍していたのは、実のところ、日本の年号で言えば「昭和」の時代なのだ。「現代」思想はつまり「昭和」の思想なのだ。

そこで本書は「現代思想」以後のフランス哲学、すなわち「現代フランス哲学」に焦点を当てて、構造主義／ポスト構造主義で有名なフランス哲学は「六八年五月」を契機として、多様な広がりを見せることになる。「状況や経験への結びつき」を特徴とするフランス哲学は、社会の変容とともに、政治、宗教、科学、技術、ジェンダー、エコロジー、労働など、多様な主題を論じるようになるのである。その論者には、ジャン＝リュック・ナンシーをはじめ、魅力的な名前が多く並ぶ。

「フランス現代思想」を論じた本は無数にあるが「現代フランス哲学」を論じた本はほとんどない。最新の動向を反映した濃密な書を日本語で読めることに感謝したい。(ばや)

(三二五頁 税込二二二〇円 9月刊)

中世哲学入門

——存在の海をめぐる思想史
山内志朗著 ちくま新書

中世哲学は難しい。近代哲学者たち——ハイデガー、ドゥルーズ、フーコーらに影響を与えたという点において重要視されるべきだと分かっていても、中世哲学の曖昧模糊とした海には尻込みしてしまいうに違いない。しかし、その「分からなさ」に寄り添ってくれる導師がいるとすればどうだろうか。

本書は「存在とは何か」という問いを軸に中世哲学を概観する試みである。トマスやアヴィセンナ、オッカム、ドゥンス・スコトゥスといった哲学者らの「存在」を巡る哲学が扱われるが、この「存在」という概念が実に厄介なのだ。個々の思想に入る前に押さえておかなければならない複雑な概念が多すぎる上に、それらの理解を妨げる言語の壁がある。だが、これら初学者の苦しみを理解した上で、著者は重要概念を丁寧に繰り返し説明し、我々のよき水先案内人となってくれている。

難解さ故に学びを止めることも、安易に理解することも正しい道ではない。著者は言う、わからなさから生じる「不快さを感じながら考え続けることが哲学だと思う」。(はらん)

(四〇〇頁 税込二二六五円 6月刊)

忘れられない絵を描いた人

九月頭ごろ、地元の本屋をぶらぶらしていると、突然時間の流れがゆっくりになった。周囲がしんと静まり、その本と自分だけが存在する世界になる。表紙の絵がこちらを見ていて、その目に吸われ見返し見つめる先、奥に心が誘い込まれる。暖かい、寂しい、懐かしいような。複雑にきもちの毛糸が絡まっていく。どうしようもなく惹かれるわけを考えたいけれど、その絵を見てると心がかかったように頭が回らない。だから私は実物を見て香川へ行った。

その本とは『中園孔一 ソウルメイト』同名個展のカタログだ。中園孔一は東京藝大在学時より「今年は天才がいる」と注目を集めた「壊れた機械」のように描き続け、二〇一五年七月に二五歳で急逝した画家である。彼が最後を過ごした香川で本個展は行われた。一〇〇点超の作品を浴び、私はやっぱりよくわからないまま、圧倒された。彼は多作な人だった。本格的に絵画制作を行った九年間で六〇〇点に及ぶ絵を描いた。パリエーションも豊かだった。手法も画材も様々、指や肘など自分の身体も使って絵を描いた。彼の絵はレトロゲーム風のポップな雰囲気なのだが影に銃殺されたり水墨画的なテイストで人の顔がひしめいていたり児童文学のようなどこかな草原に絵の具の竜巻が出現したり、無数の景色をうつし出す。彼はしかし言う。「表面はばらばらであっても景色は一個」だと。

「なにが描かれているのかは、そんなに重要じゃないっていうか（略）絵を描くっていうのは、自分の中で外縁を作るみたいな印象で、たくさん作ることにすごく意味があるんですけど、僕の中では一個できたら、ちょっとこっちの、なんて言うんですかね、形が現れると思うんですけど、中側はわからないし、見えないし、触れな

いから、外縁を作って表して（略）中のことを景色っていうふうに言ってるだけで、景色は一個っていうふうに感じています」。個展の終盤、生前のインタビュー映像が流れていた。初めて彼を見、声を聞いた。静かな空気を纏い、質問に対し自分の中を掘り下げ、探り探り澄んだ柔らかな声で話していた。もっと彼に近づきたいと思いつながら香川を帰った。

中園の人生に関わった人物たちへの取材と書き残された一五〇冊のノートに元記された評伝『穏やかなゴースト 画家・中園孔一を追って』を開くと、著者も中園の絵に対し「わからないさ」から出発したらしい。その著者とともに中園を追っていく中で、私の頭も少しずつ霧が晴れていった。私が見た彼の景色を羅列する。本著の中で「あんな人いない」という言葉を何度か見た。中学時、個人面談続きの先生に飲み物を買ってきた。自分も部活中で汗だくなのに人をよく見て思いやる人だった。その優しさに打たれて出た「あんな人いない」だった。彼は死にたい人のために絵を描いていた。彼は多分寂しがり屋だった。彼はよく夜の森を彷徨い歩いた。崖や軍基地など立ち入り禁止場所にも侵入した。最期の場所は海だった。子どものように自由に行きたい所へ行く。いやむしり原始の、人間のもとの姿、だろうか。そのまま大人になってどこへでも進んでいき、場所とのコミュニケーションを取る。なんて気持ち良い生き方だろう。彼の絵も言葉も感情的なだけでなく深い思考から出たもので、情勢などを超えて世界そのものと向き合っているのだと感じる。私はまだ彼に追いつけてはいない。彼の見たかった一個の景色を見たくて、私はこれからも彼を抱いて世界を生きていく。（黄丹）

パレスチナ・イスラエル読書案内

今ガザで起きていること——水、電気というライフラインが止められ、爆撃され、命が奪われ続けている現状——は、ジェノサイドに他ならない。であるにもかかわらず、欧米諸国、そして日本はイスラエルの攻撃を支持している。二〇三一年一〇月七日のハマースによる攻撃が、「テロリズム」が、契機であるかのように語られている。眼を背けたくないような惨劇に直面しながら、攻撃を支持する国に暮らし加害者となっている私たちにとって、今まさに起きているジェノサイドを一刻も早く止めるためにできることは何か。それは、問題の根源にたしかえることである。問題は一〇月七日の「テロ」にはじまったのではない。アパルトヘイト、民族浄化、シオニズム、植民地主義、人種主義の暴力を断つことこそが解決の道なのである。この紙面で私は、本を紹介することしかできない。大学にいる者として、学知が蓄積してきた記述と批判を、ここに示す。

まず何から手を付ければよいのか。ここでは早尾貴紀『パレスチナ／イスラエル論』（有志舎）を勧めたい。本書はパレスチナ問題を取り巻く学説の明解かつ包括的な概説書である。大きく思想、表象、歴史の三部構成になっており、それぞれ「民族」と「国家」をめぐる思想的展開の考察、映像作品の表象分析、占領の実態の歴史的展開や歴史認識論争を扱っている。早尾は本問題を世界史の文脈で位置付ける、当事者としての日本の立ち位置を強調する。より多くの論者の言葉が聞けるという意味では『現代思想二〇一八年五月号 特集：パレスチナ・イスラエル問題——暴力と分断の70年』（青土社）もよい。本書では一九四八年のナクバから七〇年の時機に、研究者やジャーナリストによる論考を集めた特集が組まれた。論集で

あるため、体系的に情報がまとまっているわけではない。しかしだからこそ新たな視点を導くことができ、本書自体がブックガイドとなつて今後の読書の道を示してくれるだろう。サラ・ロイ『ホロコーストからガザへ パレスチナの政治経済学』（青土社）では、政治経済学的視点からイスラエルによるパレスチナ占領の暴力性が分析されている。それは単なる低開発にとどまらない。土地や水といった資源を奪い取り、ガザ内での労働機会を奪い取ること、組織的な開発を阻害する「反開発」であるとロイは主張している。

よりミクロな視線から人々の姿に迫るのが文学だ。ジャン・ジュネ『シャティールの四時間』（インスクリプト）は、一九八二年にレバノンで起きたサブラ・シャティール大虐殺直後にシャティール難民キャンプに入った経験を描くルポルタージュである。ジュネはそこに横たわる遺体を緻密に記述し、死者と対話する。仏文学研究者である鶴飼の解説も厚く、本書を解釈し位置づける助けになる。文学からパレスチナの痛みの記憶を残す一冊だ。そして京大に馴染み深いアラブ文学研究者岡真理の『ガザに地下鉄が走る日』（みすず書房）。本書は、三十年以上にわたりパレスチナや、レバノン、ヨルダンといった周辺国を訪れ、パレスチナ人や難民と出合い言葉を交わしてきた岡によるエッセイ集である。パレスチナ人として、占領下・難民として生き、人間としての尊厳をも剥奪された人々の生の声に触れることができる。そこには、根底で人間を突き動かす決して奪われることのない希望の力が確かに感じられる。

本を手に取り、ともに声を上げよう。過去の暴力を忘れないために。そして今起きているジェノサイドを止めるために。（たいやき）

編集後記

先日、知恩寺境内で開催の「秋の古本まつり」に行ってきました。夏の下鴨、秋の知恩寺、春のみやこめっせ、これが通称「京都三大古本まつり」です。古本オタクを自称する人間として、これら三つのまつりには、毎日必ず参加したい。狙うは皆勤賞です。けれども今回の古本まつりは、なんと初日の参加が叶わず……。非常勤の仕事ゆえです。こればかりはどうしようもない。気を取り直して二日目から参加し、それ以後は皆勤賞となりました。パリッと晴れた青空と、ずらっと並んだ古本たち、その相性は格別です。

今年の知恩寺ではいい光景を見ることができました。今年から復活したチャリティーオークションです。舞台上上がった古本屋の店主さんたちが、威勢よく大きな声で「三〇〇円、五〇〇円、一〇〇〇円、一五〇〇円、はい、そこの白い帽子のお兄さんに決定！」と、手際よく大量の古本を捌いてゆくその光景は、何だかそこだけ昭和の時代が戻ってきたみたいで、見ていだけでとても気持ちのいいものでした。古本を買わなくても、この光景を見るだけで、古本まつりは十分満喫できるのではないか、そんなことを思ったりもしました（僕は合計六〇冊以上買いましたが）。

やっぱり「まつり」はいいですね。（ばや）

当てよう！ 図書カード

里芋の旬がやってきました！ コロケ、煮ころがし、スープ等々、どう調理してもおいしい里芋。そんな里芋のなかでも白くきめ細やかな肉質、丸々として形が揃っていることを特徴とした愛媛県オリジナル品種の販売名は次のうちどれでしょう。

1. 伊予姫
2. 伊予美人
3. 瀬戸姫
4. 里之美人

（はらん）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは1月15日です。



《8・9月号の解答》 8・9月号の問題の正解は、2. の盆灯籠でした。広島ではお盆に色鮮やかな灯籠をお供える風習があります。宗派を問わず普及しており、コンビニで灯籠が売られるほどです。図書カードの当選者は、ハードラーさん、スミレさん、渡世さん、きつねそば大盛りさん、いいみょんさんの5名です。当選おめでとうございます。（筏）

読者がらひゅう

○新刊コーナーはあるけれど…時々、超絶古くて（良い）おすすめ本とか…おもしろいかも!! （いいみょん）

——ご意見ありがとうございます。確かに『綴葉』では古典をあまり扱っていませんが、私は最近漱石を読んでいます、永い時を超えて読み継がれてきた古典には普遍的な面白さがあるように感じます。そればかりでなく、執筆された当時の文化や時勢が色濃く反映されていることも古典文学の特徴だと思っています。こうした文学作品だけでなく、各分野の古典的名著を取り扱うのはとても面白そうです。○8・9月号の表紙は委員の方が撮られた写真ですか。とてもよい、目を釘付けにする一枚だと思います。（文学研究科・渡世）○表紙の写真が海外でコロナ禍が明けたことを改めて感じました。いい写真ですね。

（農学研究科・スミレ）

——いい写真はかりですよ。写真担当の委員が自身の撮った写真から選んでいます。写真といえば、11月号では『月夜の晩に』、『写真論』と写真に関する書評が二本掲載されていますので、そちらも是非ご覧ください。

（筏）